動画紹介

コロナ禍のホームレス女性殴殺事件の背景

「竹信三恵子の信じられないホントの話」

インターネット動画放送「デモクラシータイムス」から

ホームレス女性殴殺事件

インターネット放送「デモクラシータイムス」では、昨年4月から動画「竹信三恵子の信じられないホントの話」を配信しています。当金融・労働研究ネットワークでは2020年5月23日 up の「差別がコロナ感染をひろげる」で同プログラムを紹介しています。2020年12月16日に配信された「路上女性殴殺事件の衝撃」では、昨年（2020年）11月16日に東京・渋谷区のバス停でホームレスの女性が、40代の男性に殴殺された事件を取り上げ、コロナ禍の女性の状況と、弱者に手を差し伸べる機能を失っている社会の在り方を告発しています。

被害にあったのは64歳の女性です。パート労働者だったが、昨年2月ごろコロナ感染が広がった時期に仕事が途絶え、亡くなった時の所持金は8円。持っていた携帯も止まっていました。

動画には女性ホームレスグループ「ノラ」のいちむらみさこさんがゲスト出演し、コロナ禍でのホームレス、特に女性たちの実情を訴えました。12月6日に、「ノラ」も呼びかけ人となり、追悼集会が取り組まれています。いちむらさんは「急な呼びかけだったけれど大勢が集まった」と言い、「他人事ではない」「派遣で働いていたけれど、コロナになってから（派遣会社から）連絡が来なくなり、今、生活保護を受けている」「今はぎりぎりの仕事があるが、仕事がなくなってしまったら同じことになる」などの思いが訴えられ、参加者はそれぞれ切実な思いで参加したことが分かったと言います。

派遣で働くホームレス

竹信さんからの「ホームレスというと一般には空き缶を集めている人とかのイメージがあるが」との問いかけに、いちむらさんは、アルミ缶のリサイクルは集めたアルミ缶をおいておくなど、一定のスペースがなければならないが、再開発の頻繁な東京では路上生活者が一カ所にとどまることが難しくなっていると説明。路上生活をしている人の中には、お金が入ると、まず使えなくなっていたスマホ使えるようにして派遣に登録して派遣会社の連絡を待つ人が相当いると話します。

現在のホームレス、路上生活者は以前パートなどで働いていたが、コロナ禍でその仕事が無くなり、一日派遣に近い派遣で何とか収入を確保し、それが途絶えると家賃を払えなくなり住んでいた家を出なければならず、ネットカフェ等を転々として過ごし、さらにお金が無くなると路上生活を余儀なくされる。そんな実態が浮かんできます。

竹信さんの「派遣で働いていた人がホームレスになっていることが多いということですね」という問いかけに、いちむらさんは「若い人は特にまあまあの数いると思います。日雇いに近い派遣だと思います。派遣で働いても家賃を払えるだけの収入が得られないが、路上生活や野宿をしながら食べ物を得ることは

できる。足りない分は炊き出しを利用したりする人もいるでしょう」と答えています。

これを補足して竹信さんは自分の取材経験を紹介します。

「支援団体を一日取材した時に、そこであった方もみんな派遣でした。男性もいましたが、その時の所持金は『100円です』とか『10円です』とか『50円です』と言っていました。コロナの中で仕事が途絶えてしまい、もともと貯えが少なかったので、収入がなくなりたちまち家賃が払えなくなり、家を出なければならなかった。中には、交通費もなくて役所まで歩いて相談に行き支援団体を紹介されたという方もいました」と。

家賃の催促を待ってほしい

竹信さんが「その時に、一人だけ『大家さんが家賃を待ってくれている』という人がいました。家賃を待ってもらうことができると、家を出ずになんとかなる人もいるのでは」と言うと、いちむらさんは「家賃が最も金額負担が大きく、それが払えないで家を出なければならないことが多いのです。ですから家賃を催促するのを待ってほしい。そうすると外へ出なければいけない状態を食い止めることが相当できると思う」と答えています。

竹信さんが「大家さんに家賃を待ってもらうためには、大家さんへの家賃の補償が必要になりますね」と補足すると、いちむらさんは「家賃補償の実現よりも、とにかく大家さんの家賃の催促を待ってもらうことが重要です」と続けます。

そして「今は寒いのです。(路上生活の長い)私たちはどこに行けば毛布があるかとか、少しでも暖かく過ごせるか情報を共有し、それでももちろん寒いですが、初めての人はすごく孤立していて、情報がないので非常に危険な状態になっていると思うのです」と答えています。

竹信さんの「家賃補償の実現」は、貧困と差別を精力的に当事者への取材を通じて明らかにしてきたジャーナリストの当然の発言です。それに対して、とにかく家賃催促をしないでほしいといういちむらさんの言葉は当事者の側からの切迫した切実な声です。その声に、大家やアパート所有者と賃借人の人と人との関係を考えさせられます。

人間的関係のない大家と居住者

昔の落語を引き合いに出しても始まりませんが、家賃をため込んで大家さんに怒られたり小言を言われたりする、人と人の関係が見えない今の社会。居住者とオーナーの間に管理業者が入り、規定通りの契約で処理される賃貸契約が一般的になっています。大きな社会問題となったスルガ銀行の不正融資事件では、不動産運営会社がシェアハウスのオーナーとなる個人投資家を大々的に募集し、オーナー=個人投資家に銀行が融資するビジネスモデルでした。そこでは、不動産など持っていない個人に、家賃収入を投資収益とする投資家となる勧誘が行われています。オーナー=大家さんと賃借人（シェアハウス入居者）の人と人の関係は初めから存在しません。(当ネットワーク掲載　鳥畑与一教授報告レジュメ「スルガ銀ビジネスモデル破綻の意味」参照)

なお、アメリカのロサンゼルス市では昨年夏から、49,133家族が「緊急家賃救済プログラム（Emergency Renters Relief Program)」の援助を受け、1家族約2000ドル(約20万7000円）の家賃支援が給付されたと報じられています。(Weekly　LALALA)

年末年始相談会　住まいなし45%

「デモクラシータイムス」とは別ですが、雨宮処凛さんがブログ「マガジン９」で年末年始に東京で開催された「年越し支援・コロナ被害相談村」の報告をしています。その中で雨宮さんは「衝撃的だったのは『住まい』に関してのデータ」だとして、相談件数は12月29日、30日、1月2日の3日間で344件。「相談者のうち、住まいが『あり』と答えたのは47%。

対して45%の人が『なし』と回答した」と報告しています。（第545回：命の危機でも生活保護を拒む人たちと、増える自殺者。の巻（雨宮処凛） ｜ マガジン9（maga9.jp））

生活保護　扶養照会の廃止を

動画「路上女性殴殺事件の衝撃」では、生活保護を受けることのできない人の事情もとりあげています。生活保護を受けるための「扶養照会」が壁になると言います。扶養照会とは生活保護を申請した人の親族に、申請した人を扶養できないか確認の連絡をすることですが、家族から暴力を受けているとか被害にあっていて家族から離れている人はそれが大きな壁になっています。

いちむらさんからは「家族でサポートし合うことを求めて、家族の中に引き戻してしまうようなシステムはやめてもらいたい」「ひとり一人をきちんと守るシステムにしてほしい」という切実な思いが出されます。

扶養照会の問題は、雨宮処凛さんのブログでも、親や兄弟に知られるのが嫌だからと申請をためらう人もいると指摘し、虐待やDVがあったり親が高齢だったりするケースでは「扶養紹介」が行われないもこともあるとしつつも「これが生活保護申請の大きな壁になっている」とし「この扶養照会について、せめてコロナ禍だけでも省略するよう求めているのだが、今のところ変化はない」と述べています。

「扶養紹介」の問題については、「つくろい東京ファンド」の稲葉 剛氏が、各種キャンペーンをインターネットで仲介している「チェンジ・ドット・オーグ Change.org」を通じて、「困窮者を生活保護制度から遠ざける不要で有害な扶養照会をやめてください！」という呼びかけをしています。

呼びかけでは、年末年始の生活困窮者向け相談会でアンケート調査を実施し、生活保護を利用していない人に理由を聞いたところ、最も多かったのは「家族に知られるのが嫌」（34.4%）という理由で、20～50代に限定すると、77人中、33人（42.9%）が「家族に知られるのが嫌」と答えた。また、生活保護を利用した経験のある人59人中、32人（54.2%）が扶養照会に「抵抗感があった」と回答しているなど指摘。「扶養照会は生活保護を権利として利用したいと思う人たちに大きな壁として立ちはだかっています」と扶養紹介の廃止を訴えています。稲葉氏のこの訴えは1月19日（2021年）の金融・労働研究ネットワーク事務局のメール着信時に7,337人が賛同となっていたましたが、1月21日午後3時過ぎには29,000人超が賛同しています。

切実な声「追い出さないで！」

「竹信三恵子の信じられないホントの話」は、番組の終わりに当事者からの訴えを紹介しています。今回の「路上女性殴殺事件の衝撃」では、竹信さんに求められて、いちむらさんは「追い出さないでほしい」と訴えました。

「家（アパート）から追い出さないで」「路上でも公共の場所からも追い出さないでほしい」と。

いちむらさんは事件の加害者の男性について「今回の事件の加害者男性も生きにくい生活があったかもしれない」と思いをめぐらせ「（加害者の男性が）掃除をしていたというから、その場所は意味のある場所だったのかもしれない」と推察。「余計なものを排除しようとする行動だったかもしれない」とし「そういう発想が恐ろしい」と「個人個人が生きていける」社会への思いを訴えています。

後書　この動画で、路上生活者を見かけることが少なくなっていることを再認識。彼らは救済されたのではなく「追い出されていた」のではないかの懸念を強めた。（均）

動画は下記を、ctrl キーを押してクリック。

【竹信三恵子の信じられないホントの話】イブを路上で過ごす　路上女性殴殺事件の衝撃～“女性不況”と非正規労働～20201216